

次の文章は山本七平の『空気の研究』という本について説明したものである。本文を読んで後の問いに答えなさい。

この本の冒頭で、山本さんはある教育雑誌記者の来訪を受けたときの会話を紹介しています。「道德教育」について聞かれたためいろいろと答えたところ、記者はしきりに「現場の空気としましては、でも……」「いや、そう言われても、第一うちの編集部は、そんな話を持ち出せる空気じゃありません」などと答えたといひます。そして山本さんはこう述べます。

大変に面白いと思ったのは、そのときその編集員が再三口にした「空気」という言葉であつた。彼は、何やらわからぬ「空気」に、自らの意志決定を拘束されている。いわば彼を支配しているのは、今までの議論の結果出てきた結論ではなく、その「空気」なるものであつて、人が空気から逃れられない如く、彼はそれから自由になれない。従つて、彼が結論を^(a)サイヨウする場合も、それは論理的結果としてでなく、「空気」に適合しているからである。

これは日常的な会話の中にいかに「空気」が出てくるかという事例ですが、このあと山本さんは、この「空気」による決定がクリティカルな場面ではとんでもないことになり得る例として、第二次世界大戦末期での戦艦大和出撃の話^(やまと)を挙げています。

戦艦大和は一九四五（昭和二〇）年四月、すでに沖繩戦が始まつている最中、沖繩に向けて出撃しました。しかし、大和の出撃が無謀で、戦略的に無意味であることは、そのときすでに明白でした。会議に出席した参謀の一人ひとり^(さんぼう)は軍事の専門家ですから、そんなことはもちろんわかつていた。にもかかわらず、出撃が決定された。出撃の決断にあらがうことができない「空気」が会議を支配していたからです。

では、この「空気」とはいったい何なのか。それは「われわれのすべてを、あらゆる議論や主張を超えて拘束している『何か』」であり、「教育も議論もデータも、そしておそらく科学的解明も歯がたたない『何か』」であると山本さんは言ひます。この「空

気」は非常に強力で、それに反することは罪にさえなると山本さんは続けます。

むしろ日本には「抗空気罪」という罪があり、これに反すると最も軽くて「村八分」^(むら)刑に処せられるからであつて、これは軍人・非軍人、戦前・戦後に無関係のように思われる。

①「空気」とはまことに大きな絶対権をもつた妖怪である。一種の「超能力」かも知れない。何しろ、専門家ぞろいの海軍の首脳に、「作戦として形をなさない」ことが「明白な事実」であることを、強行させ、後になると、その最高責任者が、なぜそれを行なつたかを一言も説明できないような状態に落し込んでしまうのだから、スプーンが曲がるの比ではない。

科学的には到底解明できそうもない「空気」の正体を把握しようというのが、この本のテーマとなります。

（中略）

では、この「空気」とはどのように醸成されるのでしょうか。山本さんは、それは「臨在感的把握」^(りんざい)から生まれると言ひます。難しい言葉ですね。どういうことなのか見ていきましょう。

山本さんは、臨在感的把握の具体例として、②イスラエルでの発掘調査の話を紹介しています。これは、イスラエルで古代の墓地を発掘した調査団の日本人が、一週間ほどで病人のようになってしまった、というエピソードです。一緒に作業にあたつたユダヤ人は何ともなく元気なままでした。つまり、日本人の発掘者だけが、出土する人骨や髑髏^(どくろ)に触れているうちに何かに祟^(たた)られるような気分になった、何か禍々^(まがまが)しいものの臨在を感じてしまったということです。

一神教であるユダヤ教を信じているユダヤ人にとって、出土する骨はただの「もの」に過ぎません。ですからそこに何かを感じ

るということはない。一方、日本人メンバーもクリスチャンではあったのですが、それ以前に日本人だということがあり、作業を続けているうちに半病人になってしまった。

山本さんは、「おそらくこれが『空気の基本型』である」と言っています。つまり、何でも無い物や、何でも無い言葉に、その実質的機能や意味内容とは別の、プラスアルファの力を感じてしまう。そこに何らかの力を持った霊のごときものが臨在しているように把握されてしまう。これが「臨在感的把握」です。

たとえば、この山は神域であるとか、この石には神様が宿っていると、ここは穢れているので清めないといけないとか、そうした日本人の民族的伝統から来る感覚というものがあります。先ほど日本にはキリスト教が広まらなかったと言ったように、日本の場合はその感覚が別の宗教によって中和されませんでしたから、そうしたもたらある感覚、自然のようなプリミティブなものに霊的な力を感じるという感覚が、現代のわれわれの中にも生きている。山本さんはそう分析しているのです。

山本さんはここではつきり書いてはいませんが、これはキリスト教的に言えば偶像崇拜にあたります。キリスト教をはじめとする一神教は偶像崇拜を厳しく禁じており、神ではないものを崇めてはいけないうことになっています。偶像崇拜の禁があるという事は、逆に、人間は一般に、自然現象やマジカルなスローガンに思わずひれ伏してしまう、そこに強い力があると感じてしまうことがある、ということの意味しているでしょう。だからこそ一神教ではそれを厳しく戒めている。一方で、一神教を信じていない人々にはそのようなブレーキがないので、さまざまなものにプラスアルファの力を感じる「臨在感的把握」に身を任せることになるのです。

絶対の神を持たない日本人にとって、臨在感的に把握し、それが絶対化される対象はあらゆるところにあります。そのため「各人はそれらの物神によりあらゆる方向から逆に支配され、その支配の網の目の中で、金縛り状態になっている」と山本さんは言います。「それが結局、『空気』支配」なのです。

何度か触れているように、「空気」の重要な特徴は一枚岩であることです。いろいろな意見があるとか、両論併記ということは無い。完全に一つにしかならないことが非常に重要です。そして不思議なことに、「空気」は明示されないのに、曖昧でわからないということがない。「空気」の中で生きている人にとって、「空気」が何であるかは極めて明晰にわかっているのです。そして、その「空気」というものができてしまうと、それに絶対的に拘束されてしまう。その「最高の例」として、山本さんは西南戦争に関する新聞報道を取り上げています。

西南戦争は、いうまでもなく近代日本が行なった最初の近代的戦争であり、また官軍・賊軍という明確な概念がはじめて現実に出てきた戦争である。こういう見方は、戦国時代にはない。同時に、大西郷は、それまで全国民的信望を担っていた人物である。従って西郷危うしとなれば、全国的騒乱になりかねない、否、少なくとも「なりかねないという危惧」を明治政府の当局がもっていた戦争である。ということは「世論」の動向が重要な問題だった最初の戦争であり、従ってこれに乗じてマスコミが本格的に活動し出し、政府のマスコミ利用もはじまった戦争である。

つまり、西郷は国民のあいだで非常に人気があったため、政府は何とかして西郷たちを悪者にしなければならなかった。そのためにマスコミを利用してキャンペーンを行い、彼らは賊軍であるという「空気」を醸成したわけです。このとき新聞は、あの手この手で西郷軍に残酷人間集団というイメージを読み手に植え付ける記事を書き立てました。

このような形で西郷軍を臨在感的に把握し、その把握を絶対化すれば、西郷軍は「カドミウム金属棒」すなわち、即座に身をひるがえしてそれから去るべき、神格化された「悪」そのものの、いわば「悪の権化」になってしまう。従って、当初は西郷側に同情的だったものも、また政府と西郷の間を調停してすみやかに停戦して無駄な流血をやめよと主張したものも、その上で西郷と大久保を法廷に呼び出して理非曲直を明らかにせよと上申ししていた者も、すべて「もう、そういうことの言える空

気ではない」状態になってしまう。というより、おそらく、そういう空気を醸成すべく政府から示唆^{しき}された者の計画的キャンペーンであつたろう。

そして山本さんは、「ここで空気支配のもう一つの原則が明らかになった」と述べ、それは『対立概念で対象を把握すること』を排除することである」と言います。これはどういうことなのでしょう。

山本さんの議論によれば、物事には必ず対立する二側面があります。完全に善であるとか、一〇〇パーセント悪ということは無い。ある部分ではよいかもしれないが、別の角度から見れば間違っているように見えるといったように、完全なY二極にはならないということです。そうであるなら、物事は常に相対的に把握することが大切になるわけで、そのような把握をしなくないと「空気」に支配されますよ、と山本さんは言っています。「空気」は一枚岩であることが重要ですから、別の角度から見れば西郷もそれほど悪くはない、といった言い方は許されません。官軍は善。賊軍は悪。賊軍側にも言い分はある、などと言つてはいけないのです。そうやって相対的な見方を排除したとき、「空気」の支配は完成します。

これに続けて山本さんは、日本社会は常に「絶対的命題^{*11}をもつ社会である」と言っています。

「忠君愛国」から「正直ものがバカを見ない世界であれ」に至るまで、常に何らかの命題を絶対化し、その命題を臨在感的に把握し、その「空気」で支配されてきた。そしてそれらの命題たとえば「正義は最後には勝つ」「正しいものはむくわれる」といったものは絶対であり、この絶対性にだれも疑いをもたず、そうならない社会は悪いと、戦前も戦後も信じつづけてきた。

そして、その絶対的命題すら相対的に見るのが可能であるとは夢にも思わず、実際に相対的に見ている世界があることなど信じていなかったのが日本でした。しかし、世界の中には、というより世界の大部分は、これを相対的に見ているのだと山本さんは

言います。それが一神教の世界です。

一神教の世界でも「空気」ができないわけではありません。「空気」自体は、人間が何人か集まっていれば比較的しやすいもので、どんな社会でもある程度はあります。しかし、多くの社会では「空気」に対抗する装置、すなわち「空気」を相対化するための方法があるのです。山本さんの考えでは、それが一神教です。なぜかと言うと、一神教の世界では絶対的なものは神だけで、神以外のものはすべて絶対ではありません。ですから、たとえば会議の中で「みんなこう思っているに違いない」という「空気」ができたとしても、それを絶対化することはできないのです。「空気」は神ではないからです。神という絶対的な基準があるがゆえに、「空気」はいつでも相対化されるのです。

これが、「空気」を含め物事を対立概念で把握することを可能にしています。あるものが善に見えるということは、必ず悪もある。あるものが極めて有効に見えるときには、何らかのコストもあるのだ。そうした二重性の中で物事を見ることに、日本人は慣れています。二重性を認めないことが「空気」の特徴だからです。逆に言えば、③「空気」の支配から逃れるためには、常に物事を対立概念で見る必要があるのです。

(大澤真幸『山本七平「空気」の研究——「忖度」の温床』)

《注》

*1 「村八分」刑……江戸時代以降、村落で行われた私的な刑罰。村のおきてにしたがわない者に対し、村人全体がその家と関係を絶つこと。仲間外れ。

*2 先ほど……本文では中略となっている部分で、日本ではキリスト教が広まらなかったということが述べられている。

*3 プリミティブ……自然のままであるさま。原始的。

*4 偶像崇拜……神仏像、ミイラ、樹木や岩など形あるものを信仰の対象とすること。ユダヤ教やキリスト教などの一神教は、

基本的に神を目に見える形にすることを禁止した。

*5 一神教……ただ一つの神だけの存在を認めて信仰する宗教。キリスト教、ユダヤ教など。

*6 物神……崇拜や信仰の対象となるもの。

*7 西南戦争……一八七七年、西郷隆盛を中心として鹿児島の子族（元武士の人々）が明治政府に対する不満から反乱を起こした。西郷軍は政府軍に鎮圧された。

*8 官軍・賊軍……官軍とは、天皇（朝廷）側の軍のことであり、賊軍とはその敵の軍をさす。一般的に官軍＝正義、賊軍＝悪となる。

*9 カドミウム金属棒……『空気の研究』のなかで、戦後の公害病のひとつであるイタイイタイ病の原因とされるカドミウムの金属棒を取り出した瞬間に、触ったり近づいただけで害があるわけではないのに、取材に来ていた新聞記者たちがのけぞって逃げ出したというエピソードが語られる。

*10 上申……意見などを上官、上司などに申し上げること。

*11 命題……論理学において、真であるとか偽であるとか判断できる内容を言葉で表現したもの。

問一 〓部(a) 〓部(c)のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 〓部(x)「クリティカル」の本文中での意味として最も適当なものを選びなさい。

ア 批判的 イ 決定的 ウ 危機的 エ 本質的 オ 超常的

問三 空欄 Y には、文脈上、対照的な意味をもつ漢字二字の語が入る。その語と最も関連があるものを選びなさい。

ア トランプ イ オセロ ウ 将棋 エ すごく オ 百人一首

問四 〓部①「『空気』とはまことに大きな絶対権をもった妖怪である」とあるが、これは「空気」のどのような点をたえたものか。説明しなさい。

問五 〓部②「イスラエルでの発掘調査の話」とあるが、この例についての説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 「空気」とは、神を崇拜するか自然を崇拜するかというように、宗教次第で生じるか生じないかが決まるものであり、それを「臨在感的把握」として説明するための例となっている。

イ 「臨在感的把握」とは、単なる物質に特別な力を感じてしまうことであり、それはキリスト教的に言えば「偶像崇拜」にあたるということの例として、「山本さん」が説明している。

ウ 髑髏には、自然を崇拜する日本人に働きかける何か禍々しいものが臨在しており、たまたまそれを発掘したのがユダヤ人ではなく日本人であったため「空気」が生じたと説明している。

エ キリスト教と違い日本人は偶像崇拜の禁止がないため、物質に臨在を感じる信仰が身についてしまい、髑髏に触れたときにも特別な力を感じる「空気」が生じたという説明になっている。

オ 何でもないものに特別な力を感じることが「空気」の発生する原因であり、その具体例として、日本人が人骨や髑髏に崇りのようなものを感じるということを説明している。

問六 ――部③「『空気』の支配」とあるが、どういうことか。本文全体をふまえて説明しなさい。

問七 本文の内容に関する説明として適当なものを二つ選びなさい。

- ア 日本人は絶対の神をもたず、他のあらゆるところで神的な力を感じてそれに縛られるため、空気を相対化しづらい。
- イ 戦艦大和が戦略的に無意味な出撃をした背景には、「抗空気罪」を回避しようとするという論理的な判断があった。
- ウ 西郷軍は実際には正義の軍であるのに、根拠のないキャンペーンにより「悪」というイメージを植え付けられてしまった。
- エ 根拠もないのに特別な意味を臨在感的に把握する空気が生じたという点で、西南戦争と戦艦大和の例は共通している。
- オ 日本社会は一度信じた絶対的命題に疑いを持たなかったが、それは日本社会がもともとその命題を絶対視していたからだ。

〈このページは白紙です。〉

二 次の文章は三島由紀夫『豊穣の海』の一節である。松枝侯爵家の長男として生まれた清頭は、学校に上がる前に預けられた綾倉伯爵家で二つ年上の聡子と親しくなる。長じて十八歳となった清頭は、縁談がもちあがった聡子とひそかに愛しあうようになっていた。この許されない恋のため、清頭は書生の飯沼の弱みを握ることで協力を強いていた。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ある雪の朝、清頭が学校へ行こうとしていると、飯沼があたりをうかがうようにして、清頭の書斎へ入ってきた。この飯沼の新たな卑屈さは、彼の鬱然とした顔つき体つきがたえず清頭に与えていた圧力を消してしまった。

飯沼は蓼科からかかってきた電話を告げた。聡子が今朝の雪に打ち興じて、清頭と一緒に俤で雪見に行きたいから、清頭に学校を休んで迎えに来てくれないか、と言っているというのである。

こんなおどろくべき我儘な申出を、清頭は生れてから、まだ誰からも受けたことがなかった。もう登校の支度をして、片手に鞆を下げて、飯沼の顔を見ながら茫然と立っていた。

「何ということ言つて来たんだ。本当に聡子さんがそんなことを思いついたのだろうか」

「はい。蓼科さんが言われることですから、間違いはありません」

① おかしなことに、そう断言するときの飯沼は多少の威を取り戻し、あたかも清頭がそれに抗らえば、道徳的な非難をにじませそうな目色をしていた。

清頭はちらと背後の庭の雪景色へ目をやった。(b) ウムを言わせぬ聡子のやり方で、自分の矜りを傷つけられるよりも、もっと素速く、巧みなメス捌きで矜りの腫物を切り取られた涼しさがあった。気づかぬほどの素速さで、こちらの意志を無視されることの、一種新鮮な快さ。『僕はもう聡子の意のままになろうとしている』と考えながら、彼は、まだ積もるほどではないが、中ノ島や紅葉山をまぶしかかっている雪の緻密な降り方を、一目で心に畳んだ。

「じゃ学校へはお前から電話をかけて、僕が今日風邪で欠席すると伝えてくれ。決してお父さまやお母さまに知られぬように。それから立場へ行つて、信用のできる車夫を二人雇つて、二人乗りの俤を二人挽きで用意させてくれ。僕は立場まで歩いてゆく」

「この雪の中をですか？」

飯沼は若い主人の頬が俄かに火照つて、美しく紅潮して来るのを見た。それが雪のふりしきる窓を背にして、影になっているだけに、影に紅いのにじんでくるさまが艶やかであった。

飯沼は自分が X にかけて育てた少年が、一向に英雄的な性格には育たなかったが、目的はともあれ、こうして瞳に火を宿して出発するさまを、満足して眺めている自分におどろいた。かつては彼が蔑んでいた方向、今清頭が向かってゆく方向にも、遊惰のなかに、まだ見出されぬ大義がひそんでいるのかもしれない。

麻布の綾倉家は長屋門の左右に出格子の板書をそなえた武家屋敷であるが、人手の少ない家で、長屋には人の住んでいる気配がない。屋根瓦の稜々は、雪に包まれているというよりは、雪をそつとその形なりに忠実に持ち上げているように見えた。

門のくぐりのところに傘をさして立っている蓼科らしい黒い姿が見えたのが、俤が近づくころには慌しく消え、俤を門前に止めて待っている清頭の目には、くぐりの枠の中に降る雪だけがしばらく見えていた。

やがて蓼科のすばめた傘に守られて、紫の被布の袂を胸もとに合せた聡子が、うつむいて耳門を抜けて来た姿は、清頭には、何かその小さな囲いから嵩高な紫の荷を雪の中へ引き出してくるような、無理な、胸苦しいほど華美な感じがした。

聡子が俤へ上ってきたとき、それはたしかに蓼科や車夫に扶けられて、半ば身を浮かすようにして乗ってきたのにはちがいないが、幌を掲げて彼女を迎え入れた清頭は、雪の幾片を衿元や髪にも留め、吹き込む雪と共に、白くつややかな顔の微笑を寄せてくる聡子を、平板な夢のなかから何かが身を起して、急に自分へ襲いかかってきたように感じた。聡子の重みを不安定に受けとめた車の動揺が、そういう咄嗟の感じを強めたのかもしれない。

それはころがり込んで来た紫の堆積(たみ)であり、たきしめた香の薫りもして、清頭には、自分の冷えきった頬のまわりに舞う雪が、俄かに薫りを放ったように思われた。乗るときの勢いで、聡子の頬は清頭の頬のすぐ近くまで来すぎ、あわてて身を立て直した彼女の瞬間の頸筋(くびすじ)の強ばりがよくわかった。それが白い水鳥の首のしこりのようだった。

「何だって……何だって、急に？」

と清頭は② 気押された声で言った。

「京都の親戚が危篤(きとく)で、お父さんとお母さんが、ゆうべ夜行でお発ちになったの。一人になって、どうしても清さまにお目にかかりたくなくて、ゆうべ一晩中考えた末に、今朝の雪でしょう。そうしたら、どうしても清様と二人で、この雪の中へ出て行きたくなつて、③ 生れてはじめて、こんな我儘を申しました。ゆるして下さいましね」

と、いつに似げなく、稚い口調で、息を④ ハズませて言う。

俵はすでに引く車夫と押す車夫との懸声につれて動いていた。幌の小さな覗き窓からは、黄ばんだ雪の絢(かすり)が見えるだけで、車の中には薄い闇がたえず揺いでいた。

二人の膝を清頭の持ってきた濃緑の格子縞(こうしじま)の、スコットランド製の膝掛(おお)が覆うていた。二人がこんなに身を寄せ合っていることは、幼年時代の忘れられた思い出を除いてははじめてだったが、清頭の目には、灰色の微光に充ちた幌の隙間が、ひろがったり窄(せま)まったりしながら、たえず雪を誘い入れ、その雪が緑の膝掛にとまって水滴を結ぶありさまや、あたかも大きな芭蕉の葉かげにいてきく雪の音のように、幌に当る雪が大袈裟にびびくことに、ひたすら氣をとられていた。

行先を尋ねた車夫に、

「④ どこでもいい。どこへでも行ける限りやってくれ」

と答えた清頭は、聡子も同じ気持なのを知った。そして幌が上がると共にややのけぞったままの姿勢を固くして、二人ともまだ手を握り合つてさえないなかった。

《注》

*1 書生……他人の家に世話になり、家事を手伝いながら学問する者。飯沼にとって清頭は主人の息子であり、これまで年長者として清頭の面倒をみていた。

*2 蓼科……緩倉家につかえる女性。聡子のために清頭との恋を応援している。

*3 立場……人力車が発着する場所。

*4 堆積……うず高く積むこと。積み重ねること。また、そのもの。

問一 部(a) (d) のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 空欄

X

に当てはまる語句を漢字二字で答え、慣用句を完成させなさい。

問三 部①「おかしなことに」とあるが、清頭はどのような点をおかしいと感じたのか。説明しなさい。

問四 — 部②「気押された声で」とあるが、このときの清頭はなぜ聡子に対して気押されていたのか。その理由として適当でないものを一つ選びなさい。

ア 現れた聡子の顔は見えなくても、紫の衣類を身にまとった全身の様子の華やかさに目を奪われていたから。
イ 自分の意志を一度も確認することなく我儘を通そうとするのは、聡子らしくない言動で戸惑っているから。
ウ 聡子の急な我儘を聞いて、聡子が幼い頃からの力関係を再び取り戻そうとしていることを感じ取ったから。
エ 目の前にいる聡子の香の薫りが自分を包んでくことやその白く美しい頬に対して、胸が高鳴っているから。
オ 白い雪を身にまといつつ微笑みながら俥に乗り込んできた聡子を見て、迫り来る美しさに圧倒されているから。

問五 — 部③「生れてはじめて、こんな我儘を申しました」とあるが、清頭は聡子が「こんな我儘」を言ってきたことを受けてどういう心情になったか。説明しなさい。

問六 — 部④「どこでもいい。どこへでも行ける限りやってくれ」とあるが、このときの清頭的心情として最も適当なものを選びなさい。

ア 二人でずっと寄り添ったまま遠くまで行きたいと高揚する思いと共に、思い切った行動をしている今の状況に緊張し余裕のない気持ち。
イ 成長してからはじめて二人が寄り添う喜びが奪われないように、一刻も早くこの場を離れ人目につかない場所へ逃れたいと焦る気持ち。

ウ ようやく二人きりで会うことができた喜びのあまり、結ばれない運命だという現実を忘れてこのまま一緒に逃げる決意を固めた気持ち。
エ 周囲の人々に嘘をついてまで二人で過ごすことの幸福をかみしめているが、この後どこへ向かえばいいのか決められず困惑する気持ち。
オ 二人が幼い日のように再び一緒に雪見にいけることへの嬉しさが大きくて、時間の許す限りできるだけ遠くまで行きたいと願う気持ち。

問七 本文の特徴を説明したものとして適当でないものを一つ選びなさい。

ア 人物の外見と情景の違いが目立つ色の取り合わせで描写しており、視覚的な美しさが表現されている。
イ 降り積もっていく雪の白さを背景に、清頭の高まる心情がその表情を通して鮮やかに表現されている。
ウ 清頭と聡子は優雅で洗練された生活を送る身分であることが、両家の家屋や所持品の描写から読み取れる。
エ 清頭と聡子の幼い日の姿を説明することで、現在の二人の関係性に変化が生じたことを強調している。
オ この雪の日の聡子の外見の美しさは、清頭の間接的な感覚を通して様々なたとえを用いながら表現されている。

問八 三島由紀夫の作品を一つ選びなさい。

ア 死者の奢り イ 金閣寺 ウ 太陽の季節 エ 雪国 オ 斜陽

解答は、正しいに書くこと。
記号や句読点も一字に数えること。
※欄には記入しないこと。

受験番号		
氏名		
※		

一

問一

a

b

c

問二

問三

問四

問五

問六

問七

二

問一

a

b

c

d

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

※

※

※

※